

●松井学長 6年間のご活躍について

「ごきそ」2010. 3 - 4月号に松井信行学長へのインタビュー記事があり、示唆に富む内容である。学長は2004年から6年間大学改革に取組まれ、高橋新学長にバトンタッチされる。あわせて、新入生への関係者5名のメッセージも要約した。

1. 大学の役割の変化

就任した当時は大学の法人化検討が始まった。単科大学についてはその存在が疑問視されていたが、6万名もの卒業生が営々と活動を続け、国の産業振興のために尽くしてきたことから、再編・統合の対象にならないことが今後にもつながる課題である。また、科学技術で欧米と肩を並べるようになった現在、工業大学が社会に果たす役割は変わってきている。

例えば、かつて日本の大学は同世代の8~10%が高等教育を受ける受け皿であったが、現在は52%が大学へ進学し、大学が社会に対する役割も変わってきている。名工大は産業界からの要求と、学問に立脚して教育内容を考えることのマッチングをどう実現するかが重要である。研究面では、研究プロジェクトを学内的にどう編成するかを考え、中京地域の特長を生かした制度を作り実行している。

地域の企業は世界のトップ企業でもあること、一方で、共同研究は全国区レベルで展開するため、地場産業に対する「研究協力会」と「プロジェクト研究所」の活動などは、特徴的なものである。後者の活動には、毎年20~25名のポストクの雇用、若手研究力の強化に繋がっている。

2. 大学に求められる教育・研究環境の変化

初めの2年間は学長選のゴタゴタから法人化に移行する調整段階であった。後の4年間は多くの人に支えられ、いい仕事ができたとする。当初の方向付けは、大学は異分野との融合による新しい工学の創生と地域の特長を生かした産学連携を進めることであった。前者はキャッチアップの時代からトップランナーの時代への移行を意識し、新しいジャンルを切り開いていくことであった。「産学連携を機軸に」という活動は、多くの卒業生が広い産業分野で活躍していることで実現できた。

※学内のやる気のある先生方に惜しみなく支援をしたことも、研究組織の充実、外部資金の獲得に繋がっていった。(木下副学長談)

民主党の議員が、愛知県内の4つの国立大学学長と意見交換をした。他大学では、あれが足りないと大学の窮状を訴えていたが、工科系国立大学が社会に果たすべき役割という観点から突っ込んで話をした。少子化を含め大学これらにどう向き合っていくかを考え、国立大学の再編統合という表層的な問題だけでなく、もっと深い意味で今後も輝く大学として残っていくかを考え、今まで日本の大学の中で社会にどれだけ貢献してきたか、知的インフラとして大学の価値がどれだけ蓄積されたか、今後これを社会の中にどう生かすかを骨子にして、その周辺に要求事項を付けて話をした。

もっと大きな流れの中で果たすべき役割をきちんと定義し、産業界や行政の人たちに認知されれば、大学はこれからも輝くし、このことは民間企業やあらゆる組織体でぶつかっている基本課題である。国会議員は脱官僚を考え、勉強するために真摯な対応であった。

3. 中京地域の大学として新しい「異」との交流を

日本の社会構造が変わったため、地域の子弟が受験するのは、避けられない。可処分所得の多い祖父母が息子夫婦より豊かであり、息子夫婦に「世界に雄飛しないでほしい」と思っている。企業活動は別にして、若い人が置かれている状況は動きが止まっていると思う。これは全国的な傾向であり、特にこの地域は有り余る雇用があるため、益々人の動きは止まってしまうことに危機感を持っている。

必ずしも地方大学化することが問題という訳ではない。しかし、若い人達が成長するためには、「異」と交わることが大切である。学生数 6200 名の中で留学生が 400 人以上であり、従前とは違う形で「異」とのふれあいが出てきている。お互いに意思の通じるだけの世界に籠るのでは成長がなくなる。

韓国のソウル、中国の北京・上海の他、インドネシアのジャカルタに海外同窓会を作るが、今のところ名古屋工業会とは独立して動いている。一番の目的は、地域で活動している卒業生に、より濃い人脈ネットワークを提供することである。日本企業で活躍している名工大卒業生もその地域と一緒に活動したい人や JICA のキーパーソンなども参画できるようにしている。今のところ、会費や規定の問題もあり、名古屋工業会と切り離しているが、遠くない時期にリンクできるようになって欲しい。

4. 名古屋工業会のあり方

「ごきそ」に何年卒が集まって浴衣姿で写真を撮っているような記事が沢山あるが、「ああいう記事が主流の間は入会しない」という方が複数おられる。少しは実利的な面で名古屋工業会が卒業生や在校生に提供できるものは何かを示し、これらの声に如何に関わるかが重要である。

ビジネスの世界でも最初の頃は人的ネットワークが欲しいと強く思わないがある年代になると自分の組織と同等以上に外の人との繋がりが、自分の仕事にプラスになる局面が出てくる。人的ネットワークをひとり一人に繋げていくような活動は、非常に力強い思いがあるので、同窓会は幅広く捉える必要がある。

本学の 100 周年(2005 年)記念事業について、この事業が重大なものとして学術的な色彩を濃くしようと名古屋工業会事務局長から提案・支援を受け、色々な研究会を行ったのも地域の実業界の方々に大きなインパクトになった。また、記念募金では多くの方々にお世話になり、15 億円もの寄付を集められた。お陰で 10 億円の大学基金もでき、学生支援や学術支援に活用していくが運用のためのバックアップのために事業目的を明確にして賛意を示してもらうことから始める必要がある。

名工大はこの国の新しい産業の勃興と雇用創生のために何を作り出していけるかが、大きな課題である。少子化の中で 52%の大学進学率についていえば、諸外国に比べて低い数字である。教育システムとしての大学の体質改善が必要であり、第 2 次中期計画の中にこれを織り込んでいる。

私は 1962 年に名工大に入学以来、48 年にわたり大学と関わってきた。この大学は「入学される皆さんの人生を変えます」といいたい。この大学に培われた独特の質実剛健の気風などが、皆さんの体内に新しい芽が育って、世の中に出て広がっていく。入学したときには分からないが、卒業して営々と技術の世界でやった結果が大きく花開いている。そのベースはキャンパスの中での蓄積である。先輩に続いて大学の中で思いっきり自分の時間を使って欲しい。

コメント

大学生活では勉強しなかったとか、無為な時間を随分使ったが、最近では 2 年ごとに開催するクラスの同窓会がとても楽しい。また、会社へ入り、その後独立して活動している中で、現在も勉強をし続けることができているのは、「この大学に入って人生が変わった」のであり、大きな財産である。

名古屋工業会大阪支部の広報担当を仰せつかったが、「人的ネットワークをひとり一人に繋げていくような活動」のお役に立てればと願っている。

●「新入生へのメッセージ」(要約) 「ごきそ」2010.3-4月号より

1. 自己実現に向けて 藤原俊朗氏(K31) 元名古屋工業会理事長

建設現場の見学をしたとき、現場の方々から自己実現に燃えているものを強く感じた。自己実現に向けて社会人として、また生涯にわたり自己形成に努めるための第一歩である。

- ① 専門知識を身につけつつ、知識を構造的に把握し、課題を俯瞰的に見ること。また、自らのアイデアや工夫を入れることから発見や創造が生まれる。研究者・技術者としての基本を形成し、自己実現—創造的活動を目指すこと。
- ② 人間力の中でコミュニケーション能力が自己実現のために最も必要である。情報や知識に加え、感情のやり取りが必要であり、読書と体育系のクラブ活動を勧める。これらを通じ、相手のために尽くす人間性が育成できる。
- ③ 大学の外、国内と海外を見る目を養うことが必要である。海外では相手方の歴史宗教と国民性を理解すること及び海外旅行で海外を知ることも、将来役に立つ。
- ④ 社会も企業も変化する。これに応じた能動的問題解決能力を身につけることが自己実現に繋がる。

2. 高い志とバイタリティを 梅野正義氏 (元名工大副学長、名誉教授)

名工大の前身である名古屋高等工業学校(1905年開校)は名古屋大学(1908年官立第8高等学校)より古い。日本の大学生は大学に入ると気が抜けたようになるが、インド等からの外国人留学生は非常によく勉強して入学してき、実力もある。日本の今後を心配しないでよいように自分の意志で自分自身を高めて欲しい(自助)。次に友人を多く持ち、交流を図ることで周囲の友が協力する関係を作ること(共助)。さらに公共(公的機関、大学当局を含む)を動かし、解決を図ること(公助)。

大学時代にこの三つをバランスよく養って欲しい。学生、卒業生、教職員の三者の活躍を強調が合って、名工大の発展が期待されると思う。高い志を持って活躍して欲しい。

3. Only One 技術者への第一歩 川嶋紘一郎氏 (MII 40) 名工大名誉教授

50年前に入学した者として述べたい。仕事中心の重責任期(40年間)、その後の弱責任期(10年間~)のための準備期間、無責任期が大学時代である。失敗を克服する過程で知恵を会得するのであり、多くの知的・肉体的・社会的冒険に挑戦し、多くの失敗を経験し、自己能力の限界を試すのが望ましい。これからは、世界の only one 技術を開発・保有する技術者が求められる。他人ができない課題に挑戦し失敗を繰り返すことで、専門家として認められる固有技術を保有・蓄積できる。文系出身者に対する理系人の弱点は、①自己主張が弱い、②高等・文書表現力が弱い、③社会への関心が低いに要約される。上記欠点を克服するために次の5項目に留意して欲しい。

- ① 大学では新しい知識を創造するための過程を学ぶ「何故?」がスタートである。
- ② 自律性を養いながら冒険・挑戦をする。
- ③ よい文章、論理構成の緻密さを学び、訓練する。
- ④ 先生に宿題を課す質問ができるよう予習をしよう。Takeだけでなく giveする話題を準備しよう。
- ⑤ 大学外で異なる分野・世代の人とのつながりを作ろう。

4. 実りある大学生活を 北村正氏 (Es48) 名工大教授、広報委員会委員長

人生、特に大学生活では、様々な出会いを経験すること。①まずは良書との出会いである。専門書だけでなく、人生の問題を扱っている本でバランスのとれた知識を身につけること。

②同級生との出会い。同級生は関西など西日本各地から集まっていた。クラブ活動だけでなく、同級生との出会いも充実させたい。クラブ(卓球部)のOB、他大学の学生などとの交流は有意義だった。

③研究室で先輩・同級生と苦楽を共にし、その後長く関係・交流が続いている。

④卒業生、同窓会での出会い。先輩の方々から示唆に富んだアドバイスを受けられる。

5. 大学から企業へ 河野慎司氏(M58) アイシン精機(株)主査

卒業して20年以上になる。多くの学生が大学入試を勉学のゴールと考え開放感に浸るとともにこれからの勉学知識が社会でどう役立つか漠然としているだろう。私は技術屋として企業に入ってから初めて学問(=知識)の大切さを実感した。プロとしての技術的な検証や判断を求められる場面で知識を活用することになり、必要に迫られて学生時代の教科書を開いて、知識の習得と活用を経験した。どんな技術分野や理論があるかが身につけていけば、必要なときに対応できる。実践を通して活用・応用できることが重要である。

企業では、社内外関係部署を巻き込んで、成果に繋がることを実感できる。困ったときお互いに助け合える関係や人脈が貴重な財産になり、これを育てることが必要である。勉学以外にクラブ活動など何か打ち込めるものを見つけて実行して欲しい。私はバイト先で一生懸命さを認められる経験をしたが、交友の間口を広げ、色々な出会いが人間の幅と人脈を広げることになる。大学生活を充実したものにしたい。 ■